第２分科会
４歳児たんぽぽ組・５歳児つき組

子どもがめあて（課題意識）をもって遊びを追求し、工夫を生み出すための環境づくりを探る。

・自ら課題をみつけ追求する子どもを育むために

・保育者の課題意識・教材研究・環境の構成

環境と言ってもさまざまなものがある。保育者や友達といった人的環境、自然環境、物的環境などである。子どもたちが環境にかかわりさまざまな経験をする中で、めあてをもって遊ぶために、どのように環境を構成していけばよいのか。また、保育者自身が課題意識をもつことも必要になってくる。

そこで次の３つの視点から考えてみることにした。

子どもたちのイマジネーションを膨らませる、遊びのたねをふりまくような保育者のアプローチの仕方を考えていく。

間接的な刺激に積極的に出会わせていく環境構成

意図的に見守ることをしていく。

失敗を保障していく環境構成

幼児期に体験させたり、味わわせたりしておきたい感覚のための環境を考えていく。

五感の環境構成

一人一人の子どもたちの姿から、子どもたちがどんな環境にどのようにかかわり、遊びに取り組んでいるのか。そこで保育者が、どんな課題意識をもちどのように支えたのか。子どもたちが遊びの中でめあてをもつための環境づくり、そしてその経験が小学校以降の生活や学びにどう結びつくのかを次の事例から見つめていく。

５歳児　つき組

平田　　有美

事例２　たつゆきの剣作り

４月、クラスのメンバーや担任が替わったため、戸惑ったのか、集まるということに抵抗のあったたつゆき。特に、自分の思いと異なる場面に出会ったときには、何を言っても、黙ったまま動こうとしない姿もしばしば見られた。

子　ど　も　の　姿	保育者の思い（☆）援助（・）
６月初め・・・ 友達の作った剣を見て、自分も欲しくなったのか、その友達に 「僕にも作って。」 と言う。	☆どうして自分で作ろうとしないのかな？何にでも挑戦してほしい。
Ｔ「たっちゃん、自分で作らんと。」 と言うと、たつゆきの表情がくもる。 Ｔ「先生も、一緒に作るから、やってみようよ。最初から上手くできる人なんていないよ。やってみようよ。」 と声をかけるが、やろうとしない。しばらく黙っていたが、廊下に出てしまう。	・自分で作ってみるよう声をかける。 ☆友達に作ってもらったほうが良かったのかな？声をかけない方が良かったのだろうか？
別の日に、何度か剣作りに挑戦する。声をかけたり、手伝ったりするが、自分のイメージする剣（細い剣）がなかなかうまくできず、怒ってやめてしまう。	☆自分でやろうとする気持ちはあるのだな。この気持ちを大切にしていきたいな。
６月中旬・・・ 保育室で一人、剣作りを始める。やわらかい質の大きな広告紙を使っている。 Ｔ「たっちゃん、こっちの紙の方がいいかもしれんよ。こっちでやってみる？」 と、剣を作るのに適度な厚さ、大きさの広告紙を出してみる。 「そっかー。こっちの方がいいよね。」	・作りやすそうな広告紙を選んでたつゆきに渡す。 ・できにくいところは手を貸す。

T「そうそう、上手だよ、最初から上手な人はいないもんね。先生もいっぱい失敗したよー。」 「えーっ、先生も？」 T「そうだよー。」 たつゆき、転ぶような格好をしてみせる。 保育者も紙を押さえるなど手伝いながら、時間をかけ、ようやく剣が出来る。多少、太くはなったが、うれしそうな表情。 T「たっちゃんできた、できた。良かったねー。うれしいね。大事にしなきゃね。」 「そうだ、ぼく、名前を書いとく。」 と言って剣にエンピツで名前を書く。この日家に持ち帰る。	☆たつゆきが途中で投げ出さず最後まで取り組んだことがうれしい。自分でできたという自信につながってほしい。
９月下旬・・・ 　大きな広告紙で剣を作ろうとする。しかし、なかなかうまくいかず、何度も最初からやり直しをしている。 T「たっちゃん、がんばってやってるね。」 「うん、ぼく、２０回がんばってやってみる。」 しばらくして、 「わかった。大きいからできないんだ。」 と言って、自分のはさみを持ってきて、広告紙を半分に切る。	・あきらめず取り組む姿を認める。 ・見守る。 ☆自分なりにできにくい理由や、どうすれば良いのかを考えて行動している。

たつゆきの姿から感じたこと

・どこの幼稚園にも家庭にもある広告紙。毎年、剣作りをする子どもの姿は見かける。たつゆきの広告紙とかかわる姿を追っていったことで、つまずきながらも、自分の思いやイメージを達成していこうとする姿が見られたことは良かった。

・幼稚園にはいろいろな刺激がたくさんあることがわかった。その中でたつゆきは友達の剣が刺激となり、心を動かしたのだが、子どもたち一人一人がどんなことに心を動かしているのかをていねいに見ていかなければいけないと感じた。

・自分で作らず、友達に作ってもらおうとする姿を見て、自分で作ってみるよう言葉をかけたのだが、友達に作ってもらってうれしい気持ちを感じたり、友達の作る姿を見たりすることも一つの刺激になるのではないかと思った。いつかは自分で作ってほしい、という願いはもちながら、たつゆきのペース、気持ちに沿っていくことも大切なことだと反省した。

・うまくいかなくて、悔しかったり、怒ったりなどの素直な感情も大切にしたいと思った。自分で作れるようになりたいという強い思いがあるからこそなので、こういった気持ちにも共感していくことが必要だと感じた。
・何度も失敗し、たつゆきは、自分にとって作りやすい広告紙の大きさ、質を感じ取っていったように思う。失敗をしていく姿も大切にしていかなければいけないと改めて感じた。
・遊びの中でのつまずきなどに、ちょっとしたヒントを与えていくことも大切だと感じた。そこで自信をつけ、自分で考えてみようとするなどの、次の意欲につながっていくのではないかと思った。
・物事に意欲的に取り組むために、まず保育者との信頼関係が大切だと感じた。たつゆきがだんだんと失敗を恐れず剣作りに取り組めるようになったのは、本児が安定して過ごせるようスキンシップをとったり、生活のさまざまな場面でほめたり、認めたりしていったこともかかわっているように思う。

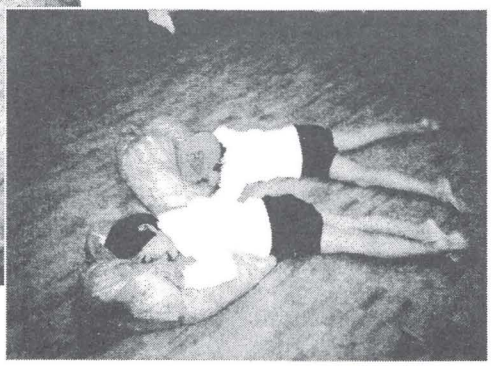
事例３　新聞紙の遊びから

身近な素材の一つである新聞紙。リサイクルされる素材でもある。この新聞紙でイメージを膨らませたり、いろいろな経験をしたりできないかと思い、「しんぶんしでつくろう」という絵本をピアノの上に置いておいた。自由に手にとって一人で、また友達と一緒に見ている子どもたち。「おもしろいね」「やってみたいねー」という会話は聞こえてくるが、実際にやってみようとする子どもたちの姿は見られなかった。そこで、クラスのみんなで新聞紙を使って遊ぶ活動をする。

子　ど　も　の　姿
１０月２０日 Ｔ「みんな新聞紙って知ってる？」 子「知ってるよー。」 Ｔ「新聞でどんなことするの？」 さおり「見て、頭がよくなるんだよ。」 Ｔ「でもこのあいだ、たけちゃんが新聞で何か作って持ってきたでしょー。じんちゃんも、新聞で大きなもの作ってたし。」 子「たけちゃん、弓矢作ってた。」 じん「おれ、剣作った。」 Ｔ「ピアノのところにこの絵本置いてたの、見た？」 子「見たよ。」 と何人かの子どもが言う。

T「新聞紙でいろんなことしてみようと思うけど、どう？」
子「やってみる！」
　最初に新聞紙に乗り、だんだんと小さく折っていくゲームをする。小さくなるにつれ、大騒ぎの子どもたち。
　次に新聞紙を長く破る活動をする。ちひろ、けいすけ、苦戦しながら、自分の身長くらいの長さにする。他の子どもたちは、すぐにちぎれてしまう。
　しばらくしてから、小さく破る活動をする。再び大騒ぎの子どもたち。
かつや「海ごっこしようよ。」
の声にみんなで新聞紙の海で泳ぐ。しばらく泳いだ後で
T「この新聞紙、どうしよっかー？」
りお「捨てないでー。」
T「じゃ、袋に集めてとっておく？」
みんなで拾い集め、大きな袋になる。
たけし「ちきゅうぎみたいだねー。」
T「こうしたらクッションにもなるよ。」
と、袋に座ってみせる。
じん「寝たらまくらだー。」
りお「新聞紙っておもしろいねー。」
とものり「ほんとおもしろい。明日幼稚園に持ってくる。」

「うまくできるかな・・・」

「きもちいいな～」


新聞紙の活動から感じたこと

・子どもたちにとって新聞紙のイメージは、さおりの「見て、頭のよくなるもの」という意見に納得していた子どもたちの姿から、あまり広がりのないものであることがわかった。
・絵本を見て心が動いても、実際にやってみようとする子どもがいなかった。この活動は、ある程度の広い空間、場が必要で、例えば保育室や遊戯室で他の友達が何かをして遊んでい

る場、自分で見つけた遊びの場では、むずかしい活動でもあるように思う。また、人数が多いほど遊びは盛り上がり、おもしろさも増すので、クラスの活動として取り入れたことは良かったように思う。

・活動の中で、かつやの「海ごっこしよう」たけしの「ちきゅうぎみたい」のようにイメージが自然にどんどん膨らんで、それをみんなで共有することができた。このことから、子どもたちはイメージを膨らませて遊ぶ力をもっており、きっかけがあればその力を発揮していくということがわかった。そういったきっかけをどのように作っていくのか、いろいろな活動の中でも考えていきたいと思う。

・指で破る、などの経験をあまりしていないため、新聞紙を長く破る活動では、すぐにちぎれてしまう子どもの姿が目立った。新聞紙には、縦と横の目があり、同じようには破れない。年長の子どもたちにとってはある程度抵抗感のある遊びであったように思う。紙をはさみばかりでなく指で破ったり、力の入れ方を考えたり、太く破ると長くならないことがわかったりなど、子どもたちがどんな経験をしているのかが見えた活動だった。またこういった経験も大切だと思った。

・その後も、長く破る活動をする子どもたちの姿が見られたことから、保育室に置いてあった新聞紙が今回の活動で、より親しみやすく楽しいものになったのではないかと考えている。

・思いきり破ったり、小さくちぎったり、その中で泳いだりなど、発散的な遊びをとても喜ぶこともわかった。

・小さくちぎり保育室いっぱいに広がった新聞紙を、ともすればゴミ箱に入れて片付けてしまいそうだが、「捨てないで」とりおが言ったことから、子どもたちにとって新聞紙が大切なものとなったことがわかった。今は、袋に入った新聞紙に座って、新聞紙特有のふわふわした感触を楽しんだり、ごっこ遊びに使ったりする子どもの姿も見られる。

・もっと五感を働かせられるような、新聞紙の音や、匂いなどにも、保育者が意識していくことも必要だと思った。

事例４　大きいおだんご、光るおだんご、かたいおだんご

一学期から何人もの子どもたちが、おだんご作りに取り組んできた。小さなかたいおだんごにいろいろな場所の「さら粉」をかけて作ったおだんごである。「落としてもこわれなかったよ。」「山から転がしてもこわれなかった。」という子どもたちの姿はたくさん見られた。

１０月に入り、そのおだんご作りの姿が少しずつ変わってきた。また、１０月２１日に赤土が入ったことから、遊びがさらに盛り上がっている。

子　ど　も　の　姿	保育者の思い（☆）援助（・）
１０月１７日・・・	

まさと、以前から作っていた大きなおだんごを大切そうに園庭に持って出る。トンネルの下でさら粉をかけている。 かずや、ゆうきもトンネルの下で会話を交わしながらおだんごを作っている。 T「先生も一緒にしてもいい？」 かずや「いいよ。」 T「まさちゃんみたいな、大きいおだんご作ってみよう。」 ゆうき「このさら粉つけるといいよ。」 集まりの時間に、みんなの前でおだんごを見せ合う場面をもつ。 まさとのおだんごを見て、 りょうた「まさとくんの大きくてすごいねー。」 ゆうやのおだんごを見て、 なみえ「心がこもっていていいと思う。」 など、友達のおだんごを認め合う子どもたち。	☆今日もおだんご作りの続きをするんだな。どうするのかな？ ・子どもたちが何を楽しんでいるのか一緒に遊びながら探る。 ・それぞれの遊びがお互い刺激になるよう、自分の遊びを振り返ったり、友達の遊びを聞いたりする場をもつ。 ☆友達のおだんごを素直に認められることはステキだな。
１０月２０日・・・ けいすけ、まさとおだんご作り。 かずや、Ｔと一緒に光るおだんご作りに挑戦。 かずや、何度もこすったり、太陽にかざしてみたりする。 T「かずちゃんすごいねー。ピカピカですごくきれい。」 と言うと、Ｔの頬におだんごをひっつける。 T「つるつるで気持ちいいねー。」 自分の頬にもくっつけ満足そうな表情。友達の頬にもひっつけている。	・めあてがもてるよう光るおだんごを作って子どもたちに見せる。 ☆おだんごの感触を頬でも楽しんでいる。
１０月２１日・・・赤土が入る まさと、けいすけ、かずや、おだんご作り。まさととけいすけは前日の続き、かずやはこわれてしまったため、新しいおだんご作り。 なみえ、みかこ、かな、まい、あき、あやもおだんごを作る。 じん、山から転がして遊ぶ。 T「きみちゃんと、たけちゃんもやってみない？」 と、保育室にいたきみと、たけしを誘ってみる。	☆友達の刺激を受け、おだんご作りをする子どもが増えた。 ・遊びにめあてがもちにくい様子の子どもも誘ってみる。

「うん、行ってみる。」 きみと、握り方が弱く、おだんごがすぐに崩れる。	☆きみとはあまり経験がないようだ。
１０月２２日・・・ 友達の影響をうけ、たけはる、かつや、りお、まおもおだんご作りに挑戦。 まさと、大谷Ｔにおだんごを見せにいく。大谷Ｔのおだんごを見て 子「山から転がしてみて。」 大谷Ｔ「これはだめだよ。まさとくんのも嫌だろう？」 まさと「うん。」 大谷Ｔ「それがわかるだけでもいい。」	☆これまでりおは、自分ではやろうとしなかった。挑戦していてうれしい。
りお、保育室で泣いている。 Ｔ「りおちゃんどうした？」 りお「あのね、おだんごがこわれた。」 Ｔ「そっか、悲しかったねー。今日ね、あきちゃんも大事なおだんごがこわれたんだよー。大事なものだから、悲しかったね。」 りお「もう、作れない。」	☆おだんごを大切に感じていたのだな。 ・りおの悲しい気持ちを受け止めるようにする。
なみえ、みかこ、いちご組の友達におだんご作りを教えている。 うれしそうに３人で見せにくる。 Ｔ「上手にできたね。なみちゃん、みかちゃんもうれしいね。やさしかったね。」	☆年下の友達とのかかわりもでてきた。 ・認めていく。
１０月２３日・・・ りお「先生、りおちゃんのおだんご復活したよ。昨日作ったよ。」と朝、うれしそうにいいに来る。 Ｔ「そうなの！よかったねー。」 この日は雨が降っていたにもかかわらず、まさと、かずや、トンネルの下でおだんご作りをする。 Ｔ「トンネルの下はぬれてなかった？」 まさと「大丈夫だよ。」 かずや「ぼくも大きいおだんご作ったよ。」	☆前日くじけていたりおが、自分でまたやってみようという気持ちになったことがうれしい。 ☆かずやはいろいろなおだんごに挑戦しているな。

おだんご作りの姿から感じたこと

・それぞれめあてをもち、何日も続けたりする姿が見られた。子どもたち一人一人がどんなことに満足しているのか一人一人違うことがわかった。また同じ遊びでも経験している内容が異なることもわかった。それらのことをていねいに見ていき、言葉をかけたり、認めたりしなければいけないと感じた。また、保育者自身も一緒に挑戦してみることで、子どもたちの力を感じることができた。

・保育者だけでなく、友達に認めてもらうということは子どもたちにとって意味のあることだと改めて感じた。こういった場を大切にしていくことで、おだんご作りの次への意欲につながったと思う。

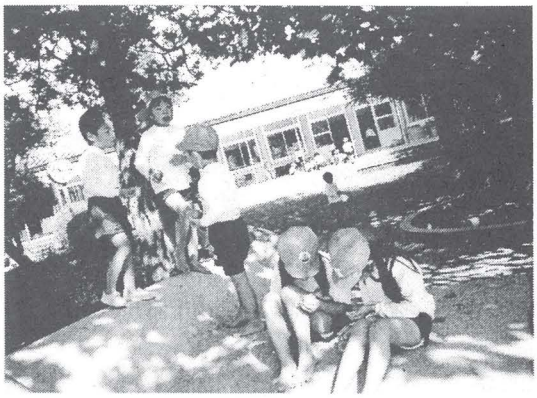
・かずやは、光るおだんごにこだわり、光にかざしたり、頬で、おだんごのひんやりとした気持ちよさや感触を味わったりなど、視覚だけでなく、肌でも感じていた。保育者がこういった姿を意識して認めていくことで、子どもたちは満足し、他の活動にもつながっていくのではないかと思う。

・友達が良い刺激となっていることを改めて感じた。まさとは１０月１５日から毎日おだんごに触れ、大切にしている。そんな姿が友達に影響し、自分も作ってみたい、と思わせたのかもしれない。また自分で作ってみて初めて、友達のおだんごの大切さにも気付いていけるのだと思う。

・おだんごを握る力も子どもたちの経験によってさまざまであることがわかった。握るということも大切な力だと思うので、他の活動でも意識していきたいと思う。

・まさとと大谷Ｔとの「大きなおだんごを山から転がしたくない」という会話では、おおきなおだんごは山から転がすとこわれる、ということを試すことなくわかっていたのかもしれない。また、大切なおだんごがこわれてしまうかもしれないことは、できないのであろう。子どもたちが用途をきちんとわけておだんごを作っていることが改めてわかった。

「ここのさら粉がいいんだよ」



「光るおだんごできるかな」

事例１　４歳児たんぽぽ組

年中児を生き物（バッタ）にどう出会わせ、どうかかわらせていくか

椙原　泉

附属幼稚園には、小学校・中学校の校庭につながる広い空間があり、そこにある草原はバッタ、コオロギの宝庫である。時期になれば、子どもたちは自然に生き物に目を向け遊びの中に取り入れていく。しかし、かかわり方や経験内容には個人差が生じてくる。以下のような教育課程上の期待する姿に向け、生き物（バッタ）とのふれ合いを学級で共有する活動としてどう構成していけば、子どもたちが「めあてをもって遊びを追究し、工夫を生み出す」環境となるのかを探っていきたい。

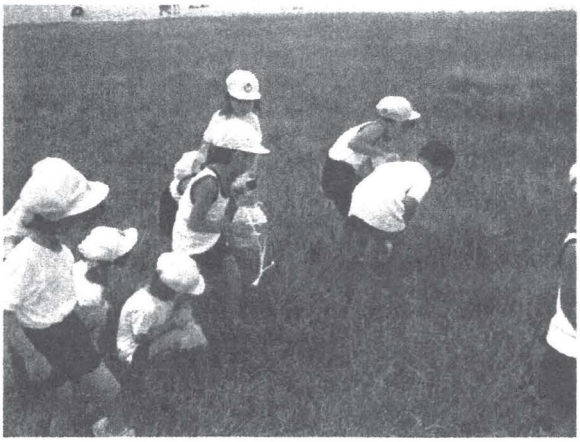
①５月中旬～　○身近な自然の環境や生き物の生息する様子に関心を持ち、触れたり採集したりする

②９月上旬～　○自然の環境の変化や生き物の様子の変化に関心を持ち、興味を深める

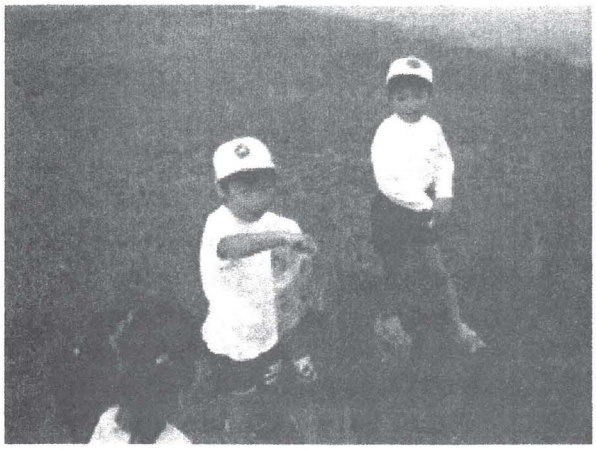
まず前提として、以下のような考えを元に環境を構成していった。

- ５月から１１月まで（７～９期）を見越して、興味をもつ時期、経験している内容の個人差をとらえていく。
- 学級すべての子どもが興味をもち、かかわっていけるようにする。
- 生き物に対するやさしい思いや接し方がもてるように支える。
- 知的好奇心を刺激し、自分から興味をもったり問題解決していけたりするような環境の構成に留意する。

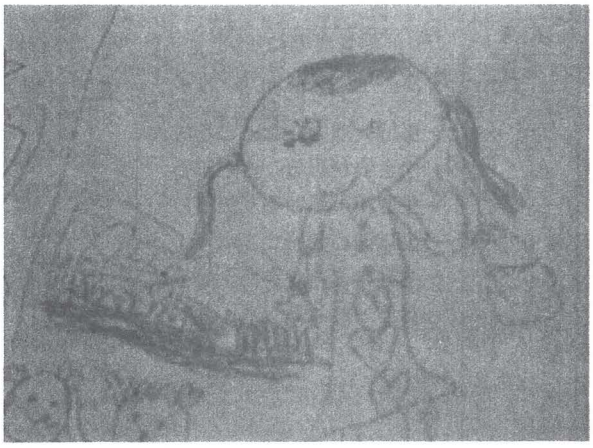
①「せんせーい、２ひきつかまえたよ」



②「あ、いた！」「どこどこ？」



③「これ、バッタがすきなくさじゃない？」



④「あのね、バッタさんと一緒なの」

⑤「食べてるよ、ほら」

⑥「ほら、見て！殿様バッタがいたよ！」

⑦「あのね、あしが６こあるの」

⑧「あ、これキリギリスだよ。バッタ
食べるから一緒に入れたらダメ」

月	○期待する姿	・保育者のねらい	☆環境の構成	◎子どもの姿
5 6 7 9	○身近な自然の環境や生き物の生息する様子に関心を持ち、触れたり採集したりする ○自然の環境の変化や生き物の様子に関心を持ち、興味を深める	・身近（園内）なところに生き物が居ることを知る ・生き物と関わる友だちの姿に関心を持つ ・生き物（バッタ）を直接見る・触れる ・生き物（バッタ）に興味をもつ ・自分でつかまえようとする ・つかまえたバッタに愛着をもつ ・友だちと一緒に活動する ・生き物への接し方を考える ・バッタの食べ物や住環境に思いをはせる ・いろいろなバッタ（種類）がいることを知る ・バッタをよく見る（観察）ことでいろいろな気づきをする ・草換え、水やり（飼育）しようとする ・他の生き物にも目を向けていく ・いろいろな遊びを展開していく	☆興味を向けられるよう、生き物に関わっている子どもの姿を学級の話題にとりあげていく。 ☆つかまえた生き物を紹介したり、見やすい場所においたりする。 ☆つかまえた生き物を入れる飼育ケース、ビニール袋を自由に使えるよう準備する。 ☆子どもの興味を引くよう保育者が積極的に草原に出かける。 ☆つかまえた生き物に愛着がもてるよう、ビニール袋に名前を書いたり、家庭でペットボトルの虫かごを用意してもらったりする。 ☆友だちに採ってもらったり、工夫しあったり、刺激し合う姿を支える。 ☆生き物にとってどう関われば良いのかを、心情面を大切に、機会をとらえて考えていく。 ☆バッタの食べ物に目を向けさせ、生き物の生死について気づかせていく。 ☆生き物の絵本・図鑑・飼育の仕方など子どもの興味に応じて提示していく。 ☆大きな飼育ケースを準備し、バッタの住環境を再現することで興味をもって観察できるようにする。 ☆遊びの中で生き物に関わる表現や内容が出てきているか捉え、支える。 ☆大谷T「音で探す」	◎ともおがカエルのエサにする、と園内でバッタを探す。 ↓ そうた、ゆうた、ななみと広がっていく ◎学級の話題にバッタ採りをあげる子どもが増え、つかまえたバッタに興味を持ったり、一緒に草原に向かう子どもが増える。・・・① ◎ビニール袋を一人ひとりが使うことで”自分のバッタ”という思いを持つ。 ◎直接触れなかったこうたが、そうたが抱えているバッタを触ってみる。 ◎つかまえることに興味があり、つかまえた後は気持ちが離れたり、自宅に持ち帰って離したりする姿がほとんどである。 ◎朝から飼育ケースを持ってきて「バッタ採り行って来ます！」と意欲をもって取り組む姿が増える。 ◎上手な取り方、バッタが痛くない取り方など友だち同士考えたり教え合ったりする。・・・② ◎日に日に大きくなるバッタに気がつく。 ◎みんなで見ていた大きなバッタの死を話題にし、みんなで考える。「ご飯がない」「手の切れる葉っぱが好き」→バッタと一緒に草を入れるようになる・・・③ ◎絶対触れないと言っていたちかがみかとバッタ採りに行き、採ってもらったバッタを喜ぶ→絵にバッタの家を表現・④ ◎大飼育ケース前で草を食べる姿を見る。「あ、口がもぐもぐ動いてるよ」・・⑤「ねえ、おんぶしてるよ！」 大飼育ケース前がくつろぎの場所になる。「ねえ、ばったさんとお茶のもうよ」 ◎図鑑で種類を調べるようになる。「今日は殿様バッタつかまえたいなあ」・・⑥ ◎はるこごっこ遊びの中で図鑑を見ながらバッタを作る。　・・・⑦ ◎ともお、そうた、自分たちなりのバッタの家を作る。 ◎ニワトリ、ザリガニ、メダカの飼育に目がむき始める。 ◎１年生との交流で、種類や生態を聞き、驚きや意欲を持つ。・・⑧

○ このバッタに関わる活動において見られた子どもの経験

ともお・・・強く生き物に興味を持つ本児だが、バッタに対する興味が学級に広がるにつれ「生き物のことならともやくん」という存在感が生まれ、学級の友だちとのかかわりが広がると共に、益々生き物に対する興味を深めている。

りゅうた・・・これまで生き物に対して全く興味を示さなかったりゅうたが、そうたにバッタをもらったことで興味をもち、次のような姿が順にみられた。

・自分から草原に出かけ、バッタを探す
・ 図鑑を片手にバッタの飼育ケースを見て種類を調べる
・ 他の虫に興味を持ち、木の溝を「こんな所にクワガタがいるんだよ」と掘ったり、芋虫を「どんな蝶になるか調べる」といって家庭で飼ったりする

ちか・・・「生き物は大嫌い」と保護者から事前に聞いていた本児だが、仲良しのみかが興味をもったことにより、バッタに向かうようになった。自分では触れないが、つかまえてもらったバッタを家に大事に持ち帰ったり、前出のように絵の中の表現として自分の横にバッタを描くなど、次第に思いをよせるようになった。

はるこ・・お家ごっこの中で、図鑑を見ながら粘土でバッタを作る。「あのね、足は６本あるの」「ここが口だよ」と、平素バッタの様子を観察しているため細かい表現がみられた。

飼育ケースについて・・具体的な環境の構成として、保育室に大きな飼育ケースを用意し、草むらの環境を創った。子どもたちは、草を食べているバッタの口が動く様子を興味をもって見たり、おんぶバッタがおんぶしている様子を間近で驚いたり、自然に観察をするようになった。また、飼育ケースの前がある種の憩いの場になり、友だちとお茶を飲んだり、のんびりと話をする姿が見られた。

小学校との交流について・・今年度行った１年生との交流の中に、バッタ採りの活動を意図的に組み込んだ。その中の一場面として、一年生がバッタに似た虫を捕まえて「これはヨシキリといって仲間を食うよ。きっと肉食だよ」と園児に教えてくれた。すると園児が「弱ってるみたいだよ。ねえ、捕まえてかごにいれる？どうする？やめる？」と訪ねた。幼・小の子どもたちはしばらく考えていたが、「やっぱりはなすかー」ということになり、草むらに離した。

○ この事例において気がついたこと

・生き物に対する思いや経験はそれぞれである。しかし今回のように学級で共有する活動として位置づけ、支えていったことで、ちかのように苦手な子どもを含み学級全員が「感心を持ち」「ふれたり採集したりする」ことができた。始めにたてた仮定のように、興味をもつ時期や経験している内容は個人差があり、特に年中の時期は幅広いスパンで経験を捉えていくことの大切さを感じた。

・今回はビニール袋を使ったり、家庭でペットボトルの虫かごを用意してもらったりし、個人のものとして家庭と園を往復していたが、その姿から年中の時期は「自分のもの（バッタ)」にしたいという思いがとても強いことを改めて感じた。

・「生き物とのかかわり」は、個人と生き物との２者関係ではあるが、興味を向けていく過程の中で友だちの影響は非常に大きかった。年中の６月から２学期に向けての友だちへの意識が遊びや活動に与える影響を改めて感じた。

・りゅうたの姿にあるように、身近な生き物は子どもの知的好奇心を刺激し、追求力を生みだしやすい教材である。「どこにいるのかな？」「どうやってつかまえるといいのかな？」「なにをたべるのかな？」「くちのうごきがおもしろいな」等という気づきや思い、疑問に共感し、一緒に考えたり、絵本や図鑑を用意したりすることで、子どもの興味や遊びがさらに広がっていくように思う。

・子どもの「自分のバッタ」とは別に、保育室に大きな飼育ケースを用意し、意図的に「自然そのままの環境」を子どもと共に準備してみた。草を食べている様子やおんぶバッタがおんぶしている様子を間近でみていろいろな気づきをすると共に、飼育ケ--スの前がある種の憩いの場になり、友だちとお茶を飲んだり話をする姿が見られた。
　子どもの興味を引きだし、持続していく環境として、「大きく見やすい」「生息しているままの環境」を用意することは大切だと思う。

・はるこの粘土の虫作りのように、生き物とふれ合った経験が、生き物との直接なかかわりのない遊びの中で見られ始めている。これからも様々な表現で現れていくと思うが、このような年中児なりの遊びの発展を捉えていきたい。

・今年度行った１年生との交流の中に、バッタ採りの活動を意図的に組み込んだ。一緒に活動していく中で弱ったバッタをどうしようか相談したり、大きさを比べ合っている姿から、生き物を通した活動は異年齢で興味や心情を共有できる活動であると感じた。また、バッタの名前や習性など知らなかったことを教えてもらって驚くとともに、それをまた友だちに伝えたりして、一年生との交流を通して興味の幅が広がっている。１年生は、個々につかまえたバッタを、教室に種類ごとに分けて飼育・観察している。幼稚園の時期にいろいろな生き物に興味をもつこと、ふれ合うこと、また違いや習性に気づいていくことなどの経験を重ねることが小学校以降の経験や学びにつながっていくように思う。

・大谷先生より「バッタを耳で探す」ことを子どもと一緒に教えていただいた。専門的な知識を持っている方に入っていただくことで遊びが膨らんでいくこと、また「５感を使って対象と関わる」ことの大切さを改めて感じた。

・今回の反省として、めあてをもたせることが保育者としての主眼になってしまい、生き物に対する心情面を十分に支えていくことができなかったように思う。もちろん配慮はしていたが、生き物の命の大切さに気づかせ、大切にしようとする心情を育てていくことが第１であることを忘れないようにしたい。

これまでの実践から感じたこと

子どもがめあて（課題意識）をもって遊びを追求し、工夫を生み出すための環境づくりを探るため、実践に取り組んできた。そこで、そのような環境について３つの観点から考えてみた。

教材について

○保育者は、目の前の子どもたちの遊びをどのように支えていけばよいのかを第一に考えてしまいがちであるが、教育課程上の期待する姿にせまっていくためには、「今」だけでなく、「次」の遊び（教材）を意識していくことも必要なことだと強く感じた。例えば泥だんご作りでは、だんだんと寒くなり、赤土山に向かわなくなった子どもたちに対して、それまでの経験を生かしてどんな活動を構成していけばよいのかを考えていくこと（園庭のプラタナスのたくさんの落ち葉に気持ちを向かせ、泥だんごのお皿や、ごっこ遊びに使う姿を認めていくことなど）が必要である。保育者が今支えている活動の一つ、二つ先を意識し、どこに課題意識を向けていくのかを考えることが、めあてをもって遊びを追求する子どもたちを支えていくことにつながっていくと考える。

○保育者がねらっていることと、子どもたちの発達課題を考えた上での教材との出会わせ方、また、子どもたちがめあてをもちやすい教材であるのかどうかを見極めていかなければいけない。

○素材のもつ多様性が子どもの遊びに追求性を生むことがわかった。一つの素材でも、保育者にその素材への知識・理解があるかないかで子どもの遊びを追求につなげられるかが変わってくる。今回、研究プロジェクトの先生方にいろいろな素材について専門的な知識を教えていただき、保育者、子どもたちの経験が広がっていったことは良かった。

○長期的な視野にたって、多様な環境作りをしていくこと（例えば果樹を植えるなど）も大切だと思った。また、今ある環境の見直しをしていくことも必要である。（ひょうたん池の活用の仕方など）

○幼児期に指先を使って遊ぶことは大切なことだが、バッタをつかまえる、泥だんごを作る、新聞紙を破るなど、普段身近にある素材で十分経験できることがわかった。こうした活動は視覚や触覚と言われる五感を通じて、子どもたちに経験を通してしか獲得できない「ちから」を与えてくれている。幼児期の子どもたちに今大切な経験が何であるかをしっかりと考え遊びを支えていかなければいけないと感じた。そして、追求するということは、遊びを深めていくことだけでなく、経験を広げていくことでもあると思った。

友達とのかかわりについて

○保育者や友達が一緒に（あるいは周りに）いることでいろいろなことに触発され、活動が盛り上がることも多い。保育者がいない場でも、子どもたち自身がめあてをもって遊びを創り出し、追求していけるように遊びを支えていくことも大切だと感じた。
○子どもたちにとっては、小さく破られた新聞紙（遊びの思いがこもっているもの）でさえ、宝物になり得る。大切にしている物が壊れてしまった時の悲しい気持ちを味わうことも大切だと感じた。その気持ちがわかるからこそ、友達が大切にしているものにも気持ちを注いでいけるのかもしれない。物を大切にする気持ちも育てていきたい。
○異年齢とのかかわりにおいて、遊びを共有して楽しんだり、遊びへの刺激をうけたり、自分の体験（経験）を伝えることで自己を振り返ったりするなど、双方向に遊びを深めあう経験につながることがわかった。園内の異年齢交流はもちろん、小学校との交流活動をもつにあたって「今幼稚園でしている経験（遊び）」と交流内容とのすりあわせをしていくことの大切さを感じた。また、幼・小が同じ敷地内という地理的な利点を活用していくことも考えていかなければいけないと感じた。

保育者の援助について
○子どもたちの中には「生き物は大嫌い」「（新聞は）頭のよくなるもの」など、実体験より先に気持ちや認識（既成概念）ができてしまっている子どももいる。そうした子どもたちをどのように支え、経験をさらに広げていくことができるかが、保育者の役割である。保育者の意識によって子どもたちの遊びが変化するということも考慮に含めた上で、遊び（教材）を考えていくことが大切だと改めて感じた。保育者のめあて（要求）とその時の子どもたちの発達課題とを考えて遊びを支えていくことを、これからの保育の中でも大切に考えていきたい。
○失敗していくことで次はどうしたらいいのか、考えたり、試してみたりするようになる。子どもたちがどこでつまずき、また乗り越えようとしているのか、子どもたちの一つ一つの活動をていねいに見ていくことやかかわっていくことが大切だと感じた。失敗しても乗り越えて取り組んだ時、子どもたちの自信につながり、また次、同じような場面に出会った時、また乗り越えていける経験となるのだろう。また、こんな失敗をするかもしれない、といったような予測もした上で、教材（適当な困難性のあるものなど）を考えたり、遊びを支えたりしなければいけないと感じた。

幼・小の生活と学びの連続性を探るについて
○幼稚園でしている経験が、どのように小学校の学びにつながっていくのかを、教材・経験内容ひとつひとつにおいて探っていく必要性を感じた。同じ教材を発達段階によってどこまでの目的（めあて）としてもっていくのか、幼年期という長いスパンで見ながら考えていくことの大切さを改めて感じた。